

3歳未満児のあそびにおける擬音語・擬態語の役割

齋藤政子 岩渕ひとみ*

問題と目的

1. 3歳未満児のあそびと言葉

3歳未満児保育を観察すると、保育者が多様な働きかけをしていることに気づく。たとえば、あそびの場面では、砂場におろされた1歳児が「ア」といった一言に対して、「おすなサラサラだね」「あんよないないしたね」「プリンつくろうか」「おさとうパラパラ」など実に多くの言葉かけを行っている。保育者の働きかけは、保育の具体的場面における働きかけにとどまらず、ものの配置などの環境設定、保育計画そのものに至るまで様々なレベルがある。あそびの中で言葉をかけて直接働きかける場合（言語的コミュニケーション）がある一方で、表情、身振りという非言語的コミュニケーションによる働きかけや、遠くから見守るなど間接的なかわり方もあるだろう。「枯葉を集める」という子どものひとつの行動に対して、焼き芋ごっこをイメージさせる言葉をかけるのか、子どもの行動の成り行きを見守るのか、どういった言葉や行動を保育者が選択するかは、子どもの表情やまわりの子どもの動きなどによって左右されるだけでなく、保育者自身が、3歳未満児の発達やあそびをどう捉えているかによって違うといえる。

ところで、子どもは、それまで物にたいして、振る、打ち付けるなどの感覚運動的な未分化な関わり方をしてきたのが、乳児期後半に入ると、そのものの用途にあった関わり方（物の慣用的操作）をするようになる。おとなの行動を模倣し、空のカップを持ち、口につけて飲むまねをしたり、シャベルで砂をすくおうとする。このように0歳後半から1歳前半にかけて、物との関わりにみられる行為が、感覚運動的行為から道具的行為へ徐々に移行した後、1歳半を超えると、「バス」といって積み木で床を走らせるような象徴的行為がみられるようになる。空のカップで飲むふりをするのは、カップに誘発されて飲む行為が見られるにすぎないかもしれないが、積み木を「ブプー」といいながら動かしている子どもは、積み木がバスとは違うことを理解した上で、バスのシンボル体として積み木を使用しているというわけである¹⁾。麻生（2002）は、象徴能力を定義づけるのは、AはAであるという現実の世界とBはBであるという虚構の世界の両方を同時に意識するという二重性の意識であると述べているが、この時期の子どもの、物と関わるあそびには、まさしくこのような世界の二重化がみられると断言していいだろう。

こうした物を何かにみたと関わる子どもに対して、保育者はその「みたと」を発展させようと、多くの言葉を投げかける。前述のように、砂を砂糖にみたとしたり、子どもをお店の店員にみたとしたりして働きかける。幼児の場合には、生活体験の中で想起されるイメージが多いため、その場の共通するイメージに基づいてやりとりを展開できるが、0、1歳

* 玉成保育専門学校

児クラスの子どもたちの場合には、その場にいた子どもたちの何人かとはイメージの共有に成功せず、保育者からの一方的な働きかけになっていることが少なくない。したがって、みたて・つもりあそびの中で、保育者がどのような働きかけをおこなうかは、子どもの遊びを混乱させることを防ぐ上で、さらに、子どもとイメージを共有しあそびのおもしろさを共感する上で、重要であると考えられる。

それでは、この保育者の働きかけの中で擬音語・擬態語はどのような位置にあるのだろうか。

2. 擬音語・擬態語（オノマトペ）とみたて・つもりあそび

オノマトペは、フランス語のonomatopéeからきた外来語で英語では、onomatopoeiaである。田守（2002）は、「オノマトペは、動物の鳴き声や人間の声を模写してつくられたくワンワン（なく）><げらげら（笑う）>といった擬声語と、自然界の物音を真似てつくられたくどんどん（戸をたたく）><ごろごろ（雷がなる）>といった擬音語、…また、音響とは関係しない、<べとべと（くつつく）><にこにこ（笑う）><ずきずき（痛む）><むかむか（する）>といった事物の状態・動作・痛みの感覚・人間の心理状態などを象徴的に表した擬態語も含めて考えるのが普通である」と述べている。そこで本稿でもこの擬音語、擬声語、擬態語を総称してオノマトペと呼ぶこととする。保育現場では、音や動きを模倣して作られたがゆえに生き生きとした描写力をもつオノマトペが保育者と子どものコミュニケーションの中に豊富に存在する。ウェルナーとカプラン（1963）が、言語発達の中に、①自然的擬音的描出活動、②相貌的描出活動、③慣用的指示活動の三つの段階があることを報告しているように、擬音語や擬態語は、子どもの初期の言葉や外界の捉え方を理解する上で重要な概念である。「からだの感じに最もフィットする音声を抽出する」²⁾ 段階が、どの文化圏に育つ子どもにもみられ、やがて、対象を力動的に表現する段階を経て、おとなと同様の慣用的指示活動の段階へ移行するのである。

遠矢（1998）は、ウェルナー&カプラン（1963）やギブソン（1979）の理論を引用しながら、擬態語・擬音語の特徴として、次の6つを挙げている。

- ① 擬態語・擬音語の構成要素は身体感覚と密接に結びついている。
- ② 擬音語・擬態語は自分の「からだの感じ」に最もフィットする音声を抽出し構成した創造物である。
- ③ 指示対象の音声特徴だけでなく、形態などの非音声特徴をからだ全体でありありと表現できるかが、擬態語・擬音語の理解を深める。
- ④ 促音、撥音、「り」、母音の長音化、音声の反復といった音声形態に加えて、身振りや表情などで生き生きと語ることが理解を深める。
- ⑤ 表現の基盤には、あらゆる感覚が渾然一体となった未分化な感覚がある。
- ⑥ 擬態語・擬音語は、発生学的に区分された五感のひとつによって捉えられる個々の特徴を表現しているのではなく、組織された知覚システムによって直接抽出された情報全体を表現している。

擬音語・擬態語は、言語体系の組織的要素ではないといわれてきた経緯があるが、保

育・療育の分野では、その未分化性、力動性によって、イメージの共有を助ける役割を担えるのではないかと期待が高まっている。したがって、低年齢の子どもたちが物（素材）と関わる時、イメージを共有する媒介として擬音語・擬態語（オノマトペ）を理解しておくことは重要なのではないだろうか

3. 本研究の目的

筆者（齋藤）は、金田との共同研究において、1歳児のあそび場面の中から観察データを収集し、「みたて・つもり」を引き出す言葉かけの分析カテゴリを用いて分析した結果、みたてにつながる言葉かけの中でも、特に擬音語・擬態語を含んだ言葉かけが、みたて・つもり活動の継続、集団内あそびの継続発展、子ども同士のイメージの共有による関係の発展、保育者の要求と子どもの気持ちのズレの回復等に、重要な意味をもっていることを明らかにした（金田・井坂：1984）。そこで本研究では、その分析カテゴリを一部修正して使い、観察対象を0歳児クラスから3歳児クラスまで拡大した上で、保育者がおこなっている言葉かけが、対象年齢や活動内容との関連でどのように変化するかについてさらに考察していきたい。

その際、筆者（岩淵）が収集した観察データの中で、低年齢児の物（素材）と関わるあそび、特にみたて・つもりあそびを分析対象としていく。みたて・つもりあそびは、ごっこあそびの前段階として位置づけられ、3歳未満児クラスでみられるあそびである。また、みたて・つもりとは、「似て非なるもの・こと・行為・人を媒介に他のものをイメージさせること、つまり、何かを他のものでみたてたり、誰かのつもりになったりしてものや人に別の意味を与えること」（齋藤：2006）であると考えられている。ごっこあそびでは、物を使用するだけでなく、状況や役割の設定・分担を仲間とともにおこなうといった点で、人と関わるあそびでもあるが、みたて・つもりあそびは、ままごとコーナーの隅でひとりでたべるまねをする行為も想定され、物との関わりにより重心がある。

したがって、本研究は、①みたて・つもりあそびを中心とした、物（素材）との関わりの中で、保育者が擬音語・擬態語（オノマトペ）をどう使用しているか、②それは、関わる対象としての素材の違いによってどう変わるのか、本研究では、素材を水・粘土・積木という日常的に乳幼児が頻りに接するものとした。③子どもの年齢に応じて保育者の言葉かけに違いがあるのかについて考察していくことを目的とする。

方法

参加観察法で行い、子どもが物（素材）と関わるあそびの場面をVTR録画した。

対象：東京都内K保育園0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラス、3歳児クラス

対象児に関しては、名前をイニシャル表記で行う。

観察期間：2005年8月から10月

観察対象場面：保育園の低年齢児クラスで、物（素材）と関わるあそびとして夏から秋にかけて頻りに実践するあそびの中で、水あそび、粘土あそび、積み木あそびを対象とした。

水・粘土・積み木は、前述のように乳幼児保育の中で教材として扱われることの多い素材であるが、流動性、可塑性、触感などの点で明らかに相違がある。これらを媒介として子

どもと関わる際に保育者は、異なる擬音語・擬態語を使用して場面展開するのではないかと考え、その言葉と行動を分析することとした。

分析方法

VTR録画と自由記述により作成した記録の中からターゲットを一人絞り、観察記録の作成を行った。記録は、保育者が素材とかかわる子どもに対して、継続的に働きかけている場面を抽出した。水あそび、粘土あそび、積み木あそびを年齢別に比較をし、みたて・つもりをひきだす保育者の言葉かけの分析を行った。分析カテゴリは金田利子・井坂（齋藤）政子（1986）の「“みたて・つもり”を引き出す保育者の言葉の分析カテゴリ³⁾」を一部修正して使用する。

表1 「みたて・つもり」をひきだす保育者の言葉の分析カテゴリ

	記号	定義	例
みたてる言葉	A	事物・事象をみたてる言葉	・ねんどを細長くして「へびだぞ」 ・こどもを積み木の上に座らせ「はい、運転手」
みたてにつながる言葉	B 1	事物の性質・状態を表わす言葉・（形容詞など）	・ねんどのかたまりを子どもに持たせながら「大きいねー」 ・積み上げた積み木を見て「高い高い」
	B 2	擬音（声）語・事物の音響音声をまねて写し取った言葉	・積み木の汽車を動かして「シュッポッポ」 ・犬のように四つんばいになって「ワンワン」
	B 3	擬態語・事物の姿態を感覚的に写しとった言葉	・ねんどのかたまりを転がしながら「コロコロ」 ・ねんどで輪を作りながら「グルグル」
	B 4	擬態語・物に対する感覚的—運動的な動作をあらわす言葉	・子どもにねんどを触らせながら「ニギニギ」 ・子どものねんどを平手で「エイエイ」
人に対する言葉	C	人への感動・驚き・発見	・子どもが行った行為へ「〇〇すごいねー」 ・子どもが作った物へ「〇〇上手だねー」
物に対する言葉	C 2	物に対する感動・驚き・発見	・粘土を伸ばしながら「ほらこれすごいよ」
その他	D	直接的・実際の行為・事象の伝達・依頼・命令・叙述・遂行などに関する言葉	・「かしてよ」行為の依頼・「いくってさ」行為の伝達

結果と考察

1. 各活動場面における保育者の言葉の分析

①粘土あそび、②水あそび、③積み木あそびにおける保育者と子どものやりとりを観察記録からエピソードとして抽出した。エピソードは、子どもが物を媒介に保育者と関わってあそんでいる場面とした。さらにその中の保育者の言葉のみを、表1のカテゴリに基づいて分析した。なお、時間配分は、水あそび5分間、粘土あそび8分間、積み木あそび5

分間と各年齢統一した時間にし、抽出した。保育者の言葉の分析をおこなった場面は表2の通りである。

表3は、1歳児クラスの水あそび、表4は、2歳児クラスの水あそび、表5は、3歳児クラスの水あそび、表6は、0歳児クラスの粘土あそび、表7は、1歳児クラスの粘土あそび、表8は、2歳児クラスの粘土あそび、表9は、1歳児クラスの積木あそび、表10は、2歳児クラスの積木あそび、表11は、3歳児クラスの積木あそびであり、保育者の言葉と行動をカテゴリ分析しながらまとめたものである。なお、表2の中の×の部分は都合上資料の収集ができなかった。また、VTRから保育者の言葉と行動を抽出するのは岩淵が担当した。

表2 保育者の言葉かけを分析した場面（×…記録なし）

年齢	①水あそび（5分間）	②粘土あそび（8分間）	③積み木あそび（5分間）
0	×	表6	×
1	表3	表7	表9
2	表4	表8	表10
3	表5	×	表11

● 水あそびにおける保育者の言葉のカテゴリ分析

表3 1歳児水の水あそび

時間	Hの言葉	主な活動内容	カテゴリ
00:00	じゃじゃじゃじゃじゃー	水を流す	B2
	はいHi, じゃじゃじゃじゃじゃー		B2
	Akいくよー	遂行	D
02:30	ぶるぶるー	顔を横に振る	B2
	はいじょうずー	子どもに感動	C1
	じゃー	水を流す	B2
03:00	じゃー		B2
	Koもいくよー	遂行	D
	じゃじゃじゃじゃじゃー	水を流す	B2
	ぶるぶるぶるー	顔を横に振る	B2
	じゃー	水を流す	B2
	じょうずー	子どもに感動	C1
	Knすごいねー		C1
	じゃじゃじゃじゃー！！	水をかける	B2
	わー！！	驚く様子	C1
	Knブルブルだよ、 そうそうぶるぶるだよ	顔を横に振る	B2
04:00	じゃじゃじゃじゃー	水を流す	B2
	じゃばじゃば	水をかける	B2

表4 2歳児の水あそび

	びゅー, これはつめたいみずです。 水と おなじみずです。	水をかける	B2
		事物の伝達	B1
		事物	A
		事物の状態	B1
	はいりたいよねちょっとまってね, 水とおなじみずだよ。 つめたーい, つめたーい あしただよ あしただよ	伝達	D
		事物	A
		事物の状態	B1
			B1
		伝達	D
			D
	ざぶーん ざぶーん	タライをひっくり返す	B2
	なくなちゃった?	伝達	D
	ざぶーん ざぶーん	水を流す	B2
	ひゅー	ホースで水をかける	B2
	ひゅーひゅーひゅー		B2
	ひゅー		B2
	びゅー		B2
	ちょっとまってねじゅんばんね	伝達	D
	びゅびゅびゅびゅ	ホースで水をかける	B2
	びびびびびー		B2

表5 3歳児水のアソビ

	これやる?	遂行	D
	Myじょうず!	感動	C1
	もうすこしちかづけてごらん。	遂行	D
	よし!!できたー。	感動	C1
	すごいすごい。		C1
	すごいすごい すごい!		C1
	ここにかおをつけてごらん	遂行	D
	できた できた!	感動	C1

● 粘土あそびにおける保育者の言葉のカテゴリ分析

表6 0歳児の粘土あそび

時間	母の言葉	主な活動内容	カテゴリ
00:00	むぎゅーぎゅっ んぎゅー	粘土を押す	B4
	あーAmすごいねー	Amの行為を見て	C1
	すごいねー	Amの行為を見て	C1
	いくよ	遂行	D

04:07	ながいながいながい	事物を見て	B1
	ぎゅぎゅぎゅ」	粘土を押す	B4
	「ういーん	粘土を伸ばす行為	B4
	ほらすごい	粘土への発見	C2
	Amのびー」	粘土を伸ばしながら	B4
	よいしょ よいしょ	粘土を押す	D
	のびのびー	粘土を伸ばしながら	B4
	ぎゅっぎゅっ	粘土を押す	B4
	ぎゅっ	粘土を押す	B4
	やわらかいねー	指で粘土を押す	B1
	ぎゅっ	指で粘土を押す	B4
	のびー	粘土を伸ばしながら	B1
	Amいくよー	遂行	D
	えいっ	粘土を押す	B4
	Mnいくよー	遂行	D
	マルマルマル	平手で粘土を転がす	B3
	えいっ	粘土を押す	B4
	あらじょうす	子どもへの感動	C1
	おせんべい	粘土で作ったもの	A
	むにむに	粘土を握る	B4
05:00	できたー	粘土への発見	C2
	どーも	粘土を貰う	D
	どうもありがとう	子どもへの言葉	D
	どーも		D
	くれないの？	子どもへの言葉	D
	どーも	粘土を貰う	D
	とれないなあ	子どもへの言葉	D
	あーくつついちゃったの？		D
	はい おだんご	粘土で作ったもの	A
08:00	どうもありがとう	子どもへの言葉	D
	Mnせーの えいっ	粘土を押す	B4
	あれ、くつついちゃった	子どもへの言葉	D
	できたーおせんべい	粘土で作ったもの	A
	Amほらおおきいおだんご		A
	えいっ	粘土を押す	B4
	えいっ		B4
	むぎゅむぎゅむぎゅ		B4

表7 1歳児の粘土あそび

時間	Hの言葉	主な活動内容	カテゴリ
02:00	Maこっちがいい？		D
	どーぞ	子どもへの言葉	D
	ちょっきーん	粘土を切る行為	B2
	Hiもちょっきーん	粘土を切る	B2
	しょうよ	遂行	D
	にゆるにゆるにゆるにゆるにゆる	粘土の様子	B3
	ちょきん ちょきん	粘土を切る音を伝達	B2
	ちょきん ちょきん		B2
	ちょきん ちょきん		B2
	おおすごーい	子どもへ感動	C1
	よーし ぎゅぎゅぎゅぎゅー	粘土を握る	B4
	Siこれこっちがわにしたらきれるよ	伝達	D
	力を込めてンー！！	粘土を握る	D
	「ちょきちょきちょき Siのおにくみしたいだね」	粘土を切る音を伝達	B2
		粘土を見立てる	A
	とんとんとんとん	叩く音を伝達	B3
	これどうぞ	子どもへの言葉	D
	ぎゅぎゅぎゅー	粘土を押す	B4
	とんとんとん…	叩く音を伝達	B3
	ぎゅーぎゅー	粘土を握る	B4
	おだんご	粘土を見立てる	A
	Hiもおだんご		A
	つくる？	遂行	D
	おだんご	粘土を見立てる	A
	つくってごらん。	遂行	D
	くるくるってまるく	粘土を転がす	B3
	こうやってくるくるくるくる…		B3
	そうそう、ころころころころ」		B3
	「くるくるくるくる…		B3
	おててに	乗せる様子	D
	のせてごらん」	遂行	D
08:00	くるくるほらっ	粘土を転がす	B3

表 8 2 歳児の粘土あそび

時間	Hの言葉かけ	主な活動	カテゴリ
02:00	これはレンガのおうち,	家をこぶたの家に見立てる	A
	これはわらのおうち,		A
	ころころころ	粘土を転がす	B3
	さあ, そこへおおかみが...	粘土で作ったおおかみを登場させる	A
	あっほんとうだ, おいしそう	感動	C2
	おいしいー。	感動	C2
	くんくんくん	匂いをかぐ様子	B2
	ここはわらのおうちだな。	家をこぶたの家に見立てる	A
	いいにおいがするなあ	伝達	D
	とんとんとん	叩くふり	B2
	あけておくれ	伝達	D
	がちゃ	開けるふり	B2
	ふー！！	口で吹く	B2
	わあー！！	驚く	C2
	とんとんとん	家を叩く	B2
	あけておくれ。あけてい？ほんとうにいい？	伝達	D
	ふー！！	口で吹く	B2
	わあー！！	驚く	C2
	さあ, えんとはいろいろ	粘土を見立てたものではない	
	はやくおゆをわかすんだ	粘土を鍋に見立てる	A
	ひゅーどぼーん	おおかみがおちる様子	B2
	あちちちちち	伝達	D
	やったあーやっつけた		D
	わーおおかみがにげていく		D
	おしまい		D
	がぶ	かむふり	B2
	もぐもぐ	食べる様子	B2
	おいしいな。	物への感動	C2
	なにかたべたいな	伝達	D
	おだんごおいしいな。	粘土を物に見立てる	A
	きのみおいしいな、		A
	なんのきのみだろう。		A
	あかいきのみおいしいな。		A
	とまと？とまとおいしいな。		A
	ういんなーおいしい。		A
	ういんなーおいしい。		A
05:00	ういんなーおいしい。		A

○ 積み木あそびにおける保育者の言葉のカテゴリ分析

表9 1歳児の積み木あそび

時間	Hの言葉	主な活動内容	カテゴリ
00:00	Haたかくなーれ	事物の状態	B1
	したんじゃないの？	伝達	D
	たおれちゃったの？		D
	いっしょにつくろうか？	遂行	D
	たかくなれしてたんでしょ？	事物の状態	B1
	たかくなーれ		B1
02:30	すごーい	感動	C2
	たかいねー！	事物の状態	B1
	Yuもたかくなーれー		B1
	ひろっておいで	遂行	D
	H2なにつくったの？	伝達	D
03:30	Yo2のおうち	積み木を家に見立てる	A
	つくったの？	伝達	D
	Yo2のおうち	積み木を家に見立てる	A
	つくったんだって。	伝達	D
	たかくなれー	事物の状態	B1
	あーあー		D

表10 2歳児の積み木あそび

時間	Hの言葉	主な活動内容	カテゴリ
00:00	H2これはなーに？	疑問	D
	Cのおうち？	積み木を家に見立てる	A
	おねえちゃんのC？	疑問	D
	H2のおうちはどこ？	積み木を家に見立てる	A
	Cとあそんでぼーるするの？	疑問	D
	どこでぼーるで		D
	ぼんってあそぶの？	ボールの状態	B2
	ぼーるで	伝達	D
	ぼんするのー。	ボールの状態	B2
	素敵なおうちだね。	積み木を家に見立てる	A
	ばばとままは？	疑問	D
	コロコロするんだー。	ボールの様子	B3
	これは何？	疑問	D
	これは？		D
	Cのおうち？これは？	積み木を家に見立てる	A
	これたかいの	積み木の状態	B1
	だれのおうち？	積み木を家に見立てる	A

05:00	おかあさんがいちばんたかいの？	疑問	D
	このちいさいのは？	積み木の状態	B1
	くずれちゃったー	伝達	D
	もっかいー		D
	これはなに？	疑問	D
	C？		D
	これは？		D
	じゃあこれはだれ？		D
	じゃあこれは？		D
	じゃあこれは？これだれもないの？		D
	いないんだあ		D
	「Hのおうちはどこ？」	積み木を家に見立てる	A

表11 3歳児の積み木あそび

時間	Hの言葉	主な活動内容	カテゴリ
00:00	ここのなかはあくの？かっこいーねー。	物への発見	C2
	こことおしてあげたら？	伝達	D
	ひゅー	車が通った音	B2
	Myがつくったんだよねーここ	伝達	D
	おーじょうずじょうず	感動	C1
	ながいのこっちにあるよ	伝達	D
	みちができたよ	積み木を見立てる	A
	Myつくったの？	疑問	D
	びるみたいで	積み木を見立てる	A
	すてきだねー	物への感動	C2
	こっちにもつなげてあげれば、Sのほうに	遂行	D
	いいんじゃないSのほうにはしても		D
	うわーたかい	事物の状態	B1
	ビルだねー	積み木を見立てる	A
05:00	Oちゃんもこういうビルいくの？		A

2. 活動の内容と保育者の言葉との関連

各活動場面における分析カテゴリーの出現回数を集計し、年齢別にグラフ化したものが、図1、3、5であり、活動全体における分析カテゴリーの割合を集計したものが、図2、4、6である。

○水遊びでの保育者の言葉について分析した結果以下のことが分かった。

水遊びでは、B2の擬音語が全体の47%と一番多く、擬音語・擬態語全体では、56%であった。

水遊びにおける保育者の言葉を抽出すると、主に水の性質を捉えた「じゃー」「びゅー」という水の流れを言語化している言葉が多く、流れる速度や水をかける多さによって、保育者の言葉の音質にも強弱が見られた。例えば、1歳児における水遊びでは、保育者がじょうろを使い子どもの頭から水をかける時はゆっくりとした言葉の音質で「じゃーじゃー」とかけていた。2歳児での水遊びでは、ホースを使って水をかけている姿があり、ホースの口をつまんで勢いよく水をかけていた。その時の言葉かけは「びゅー」という言葉がたくさん使われていた。じょうろから出る水の量と、ホースの口をつまんで出す水の量とでは、ホースの方が水の出る量は多い。水という素材では水の流れる音と量が保育者の言葉かけと密接に関係していると考えられる。このように1、2歳児クラスでは、保育者は水の感触を子どもと共有しようとして、その微妙な状態を相貌的に描出しようとしているが、3歳児クラスでの言葉かけは、顔を水につける子どもに対して「すごい」「できた」などの言葉が多くなり、水の動きを表現する擬音語・擬態語は見られなくなっている。

図1 水あそびにおける保育者の言葉
(クラス比較)

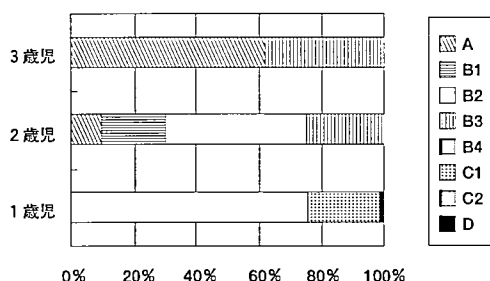


図1 水あそびにおける年齢別に見た保育者の言葉

図2 水遊び全体から見た保育者の言葉かけ
データ

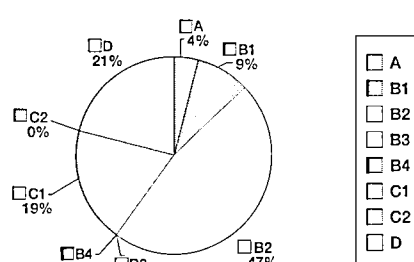


図2 水あそび全体から見た保育者の言葉の分析

○粘土遊びにおいて分析した結果以下のことが分かった。

粘土遊びではDのその他が28%と一番多く、次いでAの見立てる言葉が18%、B4の物に対する感覚的、運動的な動作を表す言葉が17%、B2の擬音語・擬態語が14%、B3の擬態語が9%、C2の物への感動などが7%、C1の人への感動が4%、B1の事物の性質・状態を表す言葉が3%であり、擬音語・擬態語全体では40%となっている。また、0歳児クラスでは、B4の直接粘土に手を押しつけるような力動的な擬態語が多く、1歳児クラスでは、粘土の動きや状態を表す擬態語が多くなり、2歳児クラスでは、粘土を三匹のこぶたのお話の小道具にみたてて場面展開をする「みたて」の言葉が多くなっている。

ここまで明確に違うのは、保育者の個性や意図の違いも影響しているとは考えられるが、水に対する表現に比べ、擬態語が増えているのは明らかである。

粘土は、水ほどの流動性はないが、可塑性があり、徐々に形を変えたあとその形を一定に保つことができる。そのため、粘土に対して、なんらかの働きかけを行う過程そのものが、あそびとして存在する。まるめたり、伸ばしたりすることを子どもの目の前で言ったり、その動きを表現することが保育者の働きかけとして行われているのはそのためであろう。

図3 粘土あそびにおける保育者の言葉
(クラス比較)

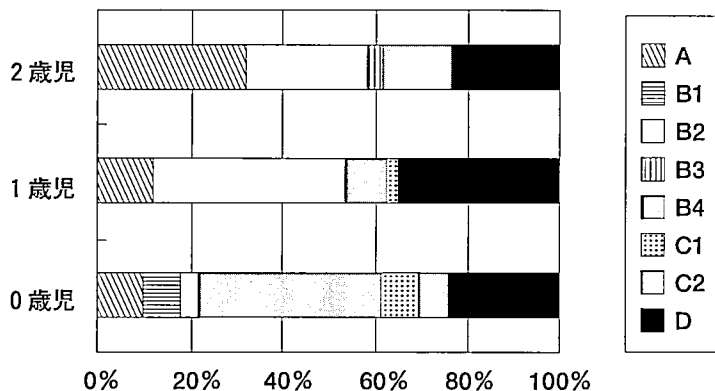


図3 年齢別にみた粘土あそびにおける保育者の言葉

粘土遊びを全体から見た保育者の言葉かけデータ

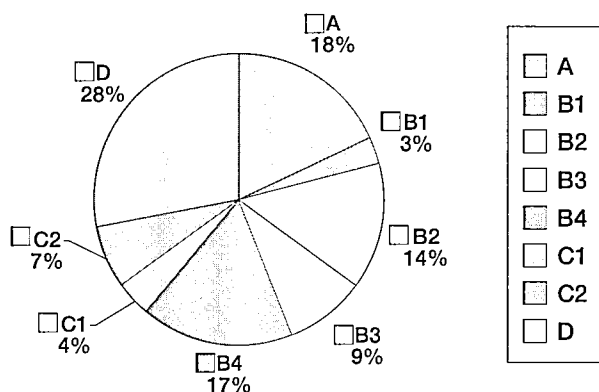


図4 粘土あそび全体における保育者の言葉

Ｃ積み木あそびにおいて分析した結果以下のことが分かった。

積み木あそびでは、Dのその他が51%と全体の半分を占め、次いでAのみたてる言葉が20%で、B1の事物の性質・状態を表す言葉が15%、B2の擬音・擬声語、C2のものへの感動が5%、B3の擬態語、C1の人への感動が2%、B4の物に対する感覚的、運動的な動作を表す言葉は0%という結果となった。擬音語・擬態語全体では、7%であった。

1歳児クラスを中心に、B1の事物の性質・状態を表す言葉かけがみられるが、擬音語・擬態語を使った言葉かけは少ない。これは、積み木は数量が常に明確で、形を変える行為は、主に「積む」と「並べる」という二種類に限定されるため、形状変化の過程を相貌的に表現することが、難しいからであろう。したがって、結果として積みあがった積み木を「たかいね」「おうちかな」というように、形容詞で表現したり、直接何かにみてる言葉が多くなっているのである。

図5 積み木あそびにおける保育者の言葉
(クラス比較)

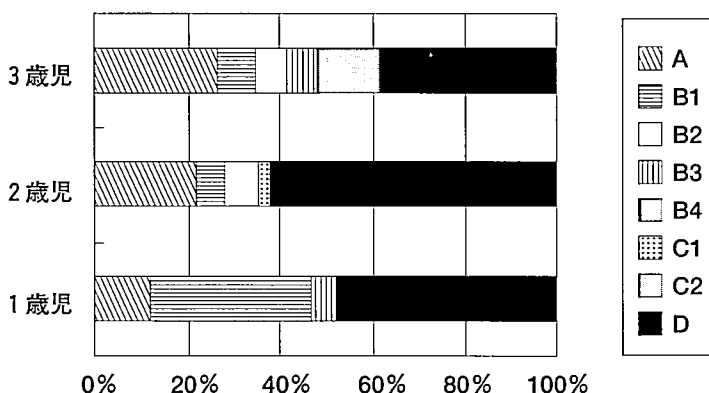


図5 年齢別に見た粘土あそびにおける保育者の言葉かけ

積み木遊びを全体から見た保育者の言葉かけデータ

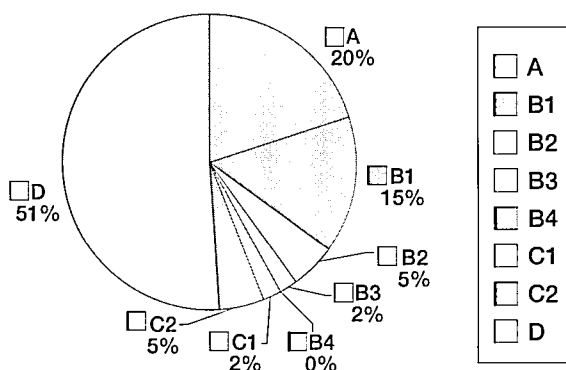


図6 積み木あそび全体における保育者の言葉かけデータ

このように、水と粘土と積み木という素材の性質の違いによって、そのあそびの内容や保育者のことばかけも変わってくる。表12は、水・粘土・積み木の定義と性質・特徴についてまとめたものであり、表13は、その違いによって保育者の言葉がどう変わるかをまとめたものである。

表12 水・粘土・積み木の定義と特徴

水	粘土	積み木
<p>【酸素と水素の化合物で、常温無味無臭の液体。沸点100度、凝固点0度。固体を氷、気体を水蒸気という。温度の高い水を湯と言う。】⁴⁾</p>	<p>【ねばりけのある土。石や鉱物nが風化したり変成作用を受けたりしてできた0.002mm以下の微細な粒子の集合体で、湿らせると粘性や可塑性を生ずる。】⁵⁾</p>	<p>【①木を積み重ねること。②いろいろな形の木片からなる幼児玩具。また、それを使って物の形を作るあそび】⁶⁾</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・可塑性がある（入れる容器によって、簡単に形が変わる） ・そのままでは形状をとどめることはできない ・形状や感触が温度の変化で変わる ・水を流す場合出る量を一定ではなく、変化することができる ・水を入れる容器を変化することにより、水の形や速さを調節することや ・もぐったり、色をつけたり、飲むまねをすることができる ・水に手や物を触れさせると音が出る 	<ul style="list-style-type: none"> ・可塑性がある ・形を残しておくことができる ・粘着力がある（手や道具に粘着させることができる） ・切断が可能・弾力性がある ・形状を変化させることによって積むことも転がすこともできる ・保育教材としては、油を加えて乾燥固化しにくくした油粘土を使用することが多い。低年齢児では、小麦粉を材料とした小麦粘土を使用することもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・可塑性がない ・縦に積むことができる ・横に並べることができる ・数に限りがある ・積み木自体の形は変わらない ・高く積みすぎると崩れる可能性がある ・積み木を一つずつ一定の量で積んでいくと、上部は不安定になる ・同じものを作ることができる

表13 活動ごとの言葉かけの特徴

水あそび	粘土あそび	積み木あそび
<ul style="list-style-type: none"> ・ 水は、可塑性があるが、とどまらないで流れてしまうため、「じゃじゃじゃじゃー」「びゅーびゅー」というような擬音語による言葉かけが多い。また、流れの速さや流れる水の量を言葉の強弱、音程を変えることにより水の状態を表している ・ 0, 1 歳児では擬音語による言葉かけが多いが、2 歳児に対しては水の温度については「冷たい」などと形容詞を使って表現する言葉かけもでてきている ・ 活動全体を見ると、みたてにつながる言葉かけは、入れ物に水を入れた時や、顔を洗ったり横に振ったりした時で、特に、小道具を使って水と関わった時に言葉かけをしていた ・ 飲むふりをした場合、飲む様子を「ごくごくしないで」などと表現している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水や積み木に比べて、粘土が形を変える性質と、変えた形を一定程度とどめる性質を持っているため、転がる様子を「ころころ」と擬態語で表現したり、まるめて「おだんご」と具体的にみたてている ・ ひとつかたまりの粘土に対して伸ばしたり、丸めたり、押しったりといった手のひら全体を使った働きかけが多いため、「ぎゅー」「えいっ」というような「物に対する感覚－運動的な働きかけに伴う言葉かけ」が多い ・ 粘土の感触・重さを「むにゅむにゅ・ドスン」などと表現している ・ 物を粘土で見立てる場合、双方のイメージが共有できる場合は「おせんべ」などよりはっきりとした見立て方をしている ・ 2 歳児では、子どもが親しんでいる「三匹のこぶた」の話と重ね合わせて台詞を言い、わらや木や煉瓦のおうちをイメージできるような言葉かけをしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 積み木は、水や粘土に比べて、形が変わらない固体であるために数や量をはっきりと確認しやすい。そのため、積み木を積み上げたり並べたりした時に「高い」などと具体的なみたてをして言葉かけをしている ・ 子どもが積み木を積み上げたり、横にならべている時、そのものが何であるか質問し、答えられたものを共感し合い、よりイメージを高めるように言葉かけをしている ・ 「これは何?」「誰のおうち?」という疑問詞を使うことで、子どものイメージがはっきりし、あそびがより具体的に展開することを狙っている

まとめと今後の課題

1. 「水あそび」「粘土あそび」「積み木あそび」と保育者の言葉

分析を通して以下のことがわかった。

- ①「水あそび」では、最も大きな可塑性・流動性を持つ「水」という素材の特徴を把握し、保育者は水の流れる速度・量などを様々な擬音語で表し、伝達していた。
- ②「粘土あそび」では、手で粘土に触れる感触を感覚的に捉えながら、ころがしたり、たたいたり、ちぎったりという様々な手指の動きを駆使し、触感だけでなく「マルマルー」「トントン」など視覚・聴覚から捉えられる感覚も擬態語で表現しようとして

いた。可塑性を持ちかつ安定した形を保てる、という粘土の特性からくる素材の感覚を擬態語で表し、言葉かけしていた。

- ③「積み木あそび」では、積み上げれば上がるほど高くなるという性質を、直接「高い」という言葉を使うことで、身の回りに存在する高いものをイメージさせるような言葉かけをしていた。また、形を変える行為は、主に「積む」と「並べる」という二種類に限定されるため、形状変化の過程を相貌的に表現することが難しく、擬音語・擬態語による言葉かけが少ないことがわかった
- ④擬音語・擬態語を使用した言葉は、3歳児クラスよりも0, 1, 2歳児クラスで多く使用され、特に1歳児クラスでは、水の動きや速さを表現する擬音語や粘土の形状変化を促す擬態語など多くのオノマトペが使用されていた。
- ⑤2歳児クラスでは1歳児クラスに比べ、擬音語・擬態語を使用した言葉はかなり減少し、別の物に直接みたてる言葉が増えていた。3歳児クラスでは積み木あそびで擬音語が数例みられる程度で擬態語は全くみられなかった。

2. 3歳未満児のあそびにおける擬音語・擬態語の役割

擬音語・擬態語は、事物の音や形状を言葉で真似たものであり、私たちの身体感覚と密接に結びつくものである。また、素材の形状の変化の過程、動きの過程そのものを言葉で表現したものであるため、言葉を聞いたときに、逆に、その動きがイメージできる。つまり、3歳未満児のあそびの中で、この擬音語・擬態語を使用することによって、素材の特性理解を促し、素材の特性に合った行為のイメージを助けることができ、それは、あそびにおける意味の共有と他者との共感につながると考えられるのである。

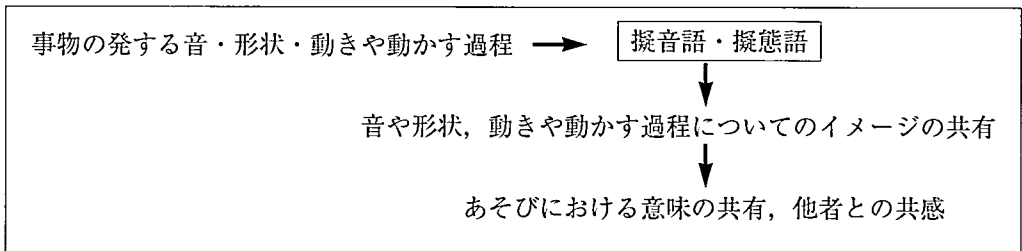


図7 3歳未満児の物とのあそびにおける擬音語・擬態語の役割（齋藤：2007）

これは図で表わすと図7のようになり、擬音語・擬態語があそびにおいて意味の共有と共感に役立っていることがわかる。

ところで、本研究では、保育者の言葉に焦点を当てたため、子どもがその言葉かけによって、何をどうイメージしているかについての分析が行われなかった。擬音語・擬態語によって子どもが「意味」や「イメージ」を保育者と共有し、自らのあそびをどう継続・発展させることができるのかについては、今後の研究課題としていきたい。

文献

麻生武（2002）乳幼児の心理—コミュニケーションと自我の発達— サイエンス社 p 93

- 岩渕ひとみ（2005）「みたて・つもり」を引き出す保育者の働きかけ 明星大学人文学部
心理・教育学科 教育学専修 卒業論文（未発表）
- 金田利子・井坂（齋藤）政子（1990） 1歳児保育の方法―「保育者―子ども―子ども」
関係の分析を通して― 金田利子・柴田幸一・諏訪きぬ編著 母子関係と集団保育 明
治図書 pp.162-174 論文の初出は注3）の文献である。
- 田守育啓（2002）オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ 岩波書店
- 遠矢浩一（1998）擬態語・擬音語とからだ 秦野悦子・やまだようこ編 コミュニケーシ
ョンという謎 ミネルヴァ書房
- 梅棹忠夫，金田一春彦，阪倉篤義，日野原重明 監修（1989）日本語大辞典 講談社
- Werner,H.& Kaplan,B. 1963 Symbol formation New york:John Wiley & Sone, Inc.
（柿崎祐一 監訳 鯨岡峻・浜田寿美男 訳 1974 シンボルの形成 ミネルヴァ書房）

注

- 1）麻生（2002）は，物に名前があることを理解する過程と物を別のシンボル体（心的要素）で指し示すことを，記号化過程と象徴化過程という言葉で区別して説明している。
麻生武（2002）乳幼児の心理―コミュニケーションと自我の発達― サイエンス社 p92
- 2）遠矢浩一（1998） 擬態語・擬音語とからだ 秦野悦子・やまだようこ編 コミュニ
ケーションという謎 ミネルヴァ書房 p84
- 3）この分析カテゴリは，以下の論文の中で使用されている。金田利子・井坂（齋藤）政
子（1986）「保育園における保育者の子どもの関係＜研究3＞1歳児保育の方法―保育
者―子ども―子ども関係の分析を通して―（出典：金田利子，諏訪きぬ，荻野美佐子，
田丸尚美，中山昌樹，三隅輝見子 井坂政子）研究代表者：竹内常一「現代社会におけ
る発達と教育」昭和60年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書
- 4）梅棹忠夫，金田一春彦，阪倉篤義，日野原重明 監修『日本語大辞典』講談社 1989
年
- 5）梅棹忠夫，金田一春彦，阪倉篤義，日野原重明 監修『日本語大辞典』講談社 1989
年
- 6）梅棹忠夫，金田一春彦，阪倉篤義，日野原重明 監修『日本語大辞典』講談社 1989
年